

2019年度(令和元年度)学校評価自己評価表

城南中学校区	校番 5	福山市立川口小学校
最終更新日	2020年(令和2年)3月6日	

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容 ・校区内5校が効果的な取組を共有し、城南スタイルの学習の成果が徐々に出てきており、学力や生活習慣での課題が改善傾向にある。・不登校、長期欠席、問題行動生徒へは、一体化した取組をしているが改善が難しい。・小中一貫教育のさらなる推進を望む。	児童生徒の現状 児童生徒の学び意欲は向上してきているが、さらに主体的に学習する力を育て、わかる授業を創っていくことが必要である。また、自己肯定感・自尊感情を高め、学校での居場所づくりや所属感を高める取組を進めることにより、学校生活の意義を認識させることが必要である。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	問題解決力 コミュニケーション力 協調性 自律性 「書く」活動と「伝える」活動を位置づけた授業の中で、主体的に学び合い、基礎的な内容を習得し、活用できる「考動力」を身に付けた児童生徒 ○「習得」の学習活動の工夫 ・条件を設定して書かせる・聞き手に意見や質問を述べさせることを通して内容を深める ○学習習慣の定着・家庭学習の充実 城南中学校スタンダードの設定・Noメディアデーの実施・放課後学習会の実施 ○個に応じた指導の充実 ・個別の指導計画の作成・構造的な板書・ヒントカード
---	--	---	---

III 自校

ミッション 地域に誇りを持ち、地域に学び、地域を愛する子どもを育てる学校づくり	学校教育目標 豊かな心を持ち、主体的に生きる児童の育成	現状 <児童生徒> ①自分の考えを、理由を付けて書き、発表することができ始めたが、具体的な理由付け、主体的な交流になりえていない。 ②自己肯定感が低い児童が多い。規律を守る児童が増えているが、守れない児童もいる。 ③新体力テストにおいて、県平均を上回る項目が80%に達していない。 <授業> 児童が、個人思考場面で理由を持って自分の考えを書いたり、ペアトーク場面で相手に理解を促すように話したりする型が見え始めている。しかし、まだ主体的・双方向的な交流になっていないので、思考を深め合えていない。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 問題解決力 \square コミュニケーション力 \square 協調性 \square 自律性 \square 低 ・課題について、自分の考えを根拠・理由を付けて書き、伝え合い、感想等を付け加えたり、言い換えたり、質問をしたりする。 中 ・課題について、自分の考えを根拠・理由を付けて書き、伝え合い、質問したり、他者の考えと比較し、共通点・相違点について考え合ったり、広げたり、まとめたりする。 高 ・課題の解決に向けて、自分の考えを根拠・理由を付けて書き、伝え合い、他者の考えと比較し、統合・分類、法則化、よりよい考えについての検討等を行う。 低 ・他者の考えを大切に、協力して活動する。 中 ・自分を振り返りながら、他者のよさを認め、協力して活動する。 高 ・自他の立場・自分の欲求ときまりとのおりあいをつけつつ、思いやりの心を持ち協力して活動する。 低 ・自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。 中 ・自分でやろうと決めたことは、最後までやり遂げる。 高 ・高い目標をもち、粘り強く努力する。	教科等 国語 外国語活動 自分の考えを持ち、豊かに表現する児童を育成する授業の創造 【国語科】～主体的に読み、書き、伝え合う児童の育成～ ①課題発見・解決型の単元構成 ②思考の場を設定した授業展開 ③つきたい力に合わせた言語活動の精選 【外国語活動】～外国語を通じて豊かにコミュニケーションを図る児童の育成～ ①ゴールを明確にした単元構成 ②段階的にメインの活動に向かう授業展開 ③伝え合う楽しさを感じ、必然性を伴うコミュニケーションの場の設定 めざす授業の姿 ・課題の解決に向けて、自分の考えを根拠・理由を付けて書き、伝え合い、他者の考えと比較し、主体的・双方向的な交流になり、思考を深め合える児童を育てる授業。
--	--------------------------------	--	---	---

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立川口小学校

年目	中期経営目標	重点分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)				
						□指標に係る取組状況	力付評価	達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況	力付評価	達成評価	総合評価
2	21世紀型“スキル&倫理観”(問題解決力・コミュニケーション力・協調性)を身に付けた児童	★見直し	標準学力検査(CRT)で全国平均を全ての学年で上回る。	①児童の主体性を高め、コミュニケーションを育てるために、授業において「つながり発言」に取り組み。 ②基礎的・基本的な内容の習得を図るために、くすのきタイム(学年の課題に応じた指導)を週4回、チャレンジタイム(学力課題のある児童への個別指導)を月1回実施する。	①児童アンケートにおいて、「自分の考えを友達とをつないで発言することができた。」と回答する割合を80%以上にする。 ②標準学力検査(CRT)において、通過率40%未満の児童の割合を15%以下にする。	①児童アンケートの結果、肯定的評価は、83.9%で、達成率は104%であった。 ②くすのきタイムを週4回どの学級でも実施した。チャレンジタイムは、5月1回、6月1回、7月2回、9月2回で、平均月1.5回実施することができ、実施率は150%であった。	3	4	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが対話する機会をさらに増やすために、授業に子ども同士で対話する場面を全クラスで位置づける。 子ども主体の授業づくりに向けて、授業のイメージや手法を教員同士で交流・共有し、児童が「学びが面白い」と思う授業づくりを目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎標準学力検査は、各学年国語・算数の12項目中、平均を上回ったのは、8項目で、達成率は67%であった。 ①児童アンケートの結果、肯定的評価は89%で、達成率は111%であった。対話する機会を全クラスで位置づけた。また、年に3回授業づくりについて教員で話し合う時間を設け、授業イメージを確かなものにしていく。 ②内容を充実させ、漢字の書き取りに加え、思考ツールを活用した話し合い活動を取り入れ、週4回実施した。チャレンジタイムは、年間15回実施し、達成率は136%であった。児童がめあてを自己決定する機会をどの学級でも実施した。 	4	4	<ul style="list-style-type: none"> ・対話する機会は増えたが、児童自身が考えの広がりや深まりを意識できていないという課題がある。授業の中で、比較・関連付けに関わる考えを価値づけていく。 ・子ども主体の学びに向けて、様々な考え方や実践事例を共有する必要がある。計画的に授業提案や、他校の授業参観を行い、学びを共有する機会を作っていく。 ・児童が自分の課題に合った学び方を考えられるよう、めあてを自分で決める取組を継続する。
2	21世紀型“スキル&倫理観”(自律性)を身に付けた児童	★見直し	長期欠席児童(年間の欠席日数が30日以上)の児童の人数を昨年度より減らす。	①自己有用感を育成し、協調性を育てるために、「がんばりみつけ」を各学期1回以上行う。 ②児童自身が自ら学校を楽しくするために取組む学級活動や児童会活動の充実を進める。	①児童アンケートにおいて、「自分にはよいところがある。」「友達よさに気付くことができた。」と回答する割合を90%にする。 ②児童が主体的に活動する特別活動(学級活動・児童会活動)の教職員研修を、年間3回以上実施する。	①長期欠席児童は1人、不登校児童は0人であり、昨年度より減少した。全学級で各学期1回の「がんばりみつけ」や「思いやり標語コンテスト」に取り組んだ。児童アンケートの結果、肯定的回答の割合は93.8%であり、達成率は104%であった。 ②児童が主体的に活動する特別活動(学級活動・児童会活動)の教職員研修を、夏季休業中に1回実施した。また、児童会が主体となった活動を学期1回実施した。	4	4	<ul style="list-style-type: none"> ・欠席状況が気になる児童の対応については、実態に応じた対策を組織(担任、主任、主事、管理職、専門職等)が一丸となって行う。 ・今後は、「がんばりみつけ」で取り組んだ内容を児童に還元するなど、児童が自分のいいところをより実感できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎長期欠席児童は6人(昨年度12人)、不登校児童は1人(昨年度1人)であり、昨年度より大きな減少が見られる。 ①全学級で各学期1回の「がんばりみつけ」や「素敵な川口っ子大賞」に取り組んだ。児童アンケートの結果、肯定的回答の割合は95.0%であり、達成率は105%であった。 ②児童が主体的に活動する特別活動の教職員研修を、冬季休業中に1回実施した。また、児童会が主体となった活動を学期1回実施した。 	4	4	<ul style="list-style-type: none"> ・欠席状況が気になる児童の対応では、関係機関とより一層の連携を図り、的確な実態把握に努める。 ・「素敵な川口っ子大賞」では、善行や努力を更に取り上げ、児童の自己有用感を高める。 ・児童会を中心に、子ども主体の学級会や委員会等の活動の充実を進め、児童自身が学校生活を作っている実感をもたせる。

健やかな体	2	21世紀型“スキル&倫理観”(自律性)を身に付けた児童	見直し	新体力テストの5段階評価で、A・B評価の児童の割合を70%以上にする。	①体力面の課題に関する研修科内容と体育科関連させた指導を各学期に1単元以上行い、1単元の授業において25分以上の運動量を確保する。	①新体力テストにおいて、全国・県平均を上回る項目の割合を80%以上にする。	①研修の内容と体育科の授業を関連させた指導、25分以上の運動量を確保した授業を全クラスで実施した。新体力テストの5段階評価でA・B評価の児童の割合は、52.4%であり、達成率は74.8%であった。本年度、県平均かつ全国平均値を上回る項目率は52.4%となり、達成率は65.5%であった。	3	2	・夏季休業中に体力向上に関する教職員研修を1回実施した。今年度の新体力テストを分析することで、児童の課題種目(投力・瞬発力)を把握し、2学期以降の体育の時間の中で、課題を克服するための運動をしていくようにする。	◎再測定新体力テスト AB評価 75% ①毎時間25分以上の運動量を確保することができた。また夏季研修で分析した児童の体力面の課題について、日々の体育の授業の中に課題に対応する運動を増やし児童の体力向上に取り組んだ。3学期に行った新体力テストの再測定では、苦手種目の立ち幅跳びと反復横跳びを測定し、両種目とも前回の記録を大きく超え県平均かつ全平均を上回る項目率は80%であった。	4	3	・体力課題に対応した授業づくりや体を動かせる場の設定を年間を通して実施していく。 ・ロング大休憩を月に2回以上を実施していき、継続していくとともに、遊ぶ道具を増やしたり、動ける場を設定したりすることで児童の運動量を増やしていく。
					②児童が楽しんで運動に取り組める時間を確保することで運動量を増やす。	②各学期に1回以上、大休憩の時間を延長したロング大休憩を設定し、児童が楽しんで体を動かし、運動量を増やす。	②一学期にはロング大休憩を1回実施した。体育館も開放することで多くの児童が体を動かし、運動量を確保することができた。	3	3	・ロング大休憩を実施し運動量を確保していくとともに、児童が陸上運動を中心に体を動かすことができる場を設定する。	②1学期に1回行っていたロング大休憩を2学期以降は月に2回以上行うようにすることで、児童の運動量をこれまで以上に確保することができた。	4	4	
市民から信頼される学校	2	確かな授業力・指導力を身に付けた教職員	継続	研究授業・初任研示範授業・授業観察等の「見せる授業」を行い、授業力の向上を図る。	①「見せる授業」を1人年間3回以上行う。	①児童アンケートにおいて、「授業がよく分かる」と回答する割合を95%以上にする。	①一人3回以上「見せる授業」を行っている。児童アンケートの肯定的評価は、93.9%であり、達成率は98.8%であった。	3	3	・「児童主体の学び」の実現に向けて、児童がめあてを自分で決めるようにするなどの、手法を組織として統一し、授業力の向上に努める。	◎「見せる授業」を行い、授業力の向上を図った。 ①一人3回以上「見せる授業」を行った。児童アンケートの肯定的評価は、98%であり、達成率は103%であった。	4	3	・授業力向上を目指し、積極的に授業を見学し、機会を増やしたり、教員同士で対話したりする。
		教育公務員としての規範意識をもった教職員。		教職員の不祥事を0にし、病休者を0にする。	①7時間45分を意識した仕事の量、手法について業務改善に努める。	①週1回の定時退校の定着を図る。 ②時間外勤務の時間を全教職員が月45時間未満にする。	①週1回の定時退校は、41.7%の達成状況である。 ②時間外勤務の時間が月45時間未満の職員は、全体の97.7%である。	4	3	・定時退校日は、現在より10分前行動を行い、定時退校の達成日を増やす。 ・行事予定を見通し、計画的に業務を行う。	・退校10分前には、声かけを行いながら、4月からの定時退校日の実施率は、53.7%であり、実施率が上がってきた。 ・時間外勤務の時間が月45時間未満の職員は、95.9%であった。9~11月の学校行事の時期に45時間を超える職員がいた。	4	3	・時間意識の声かけを継続して行い、日常の退校時刻10分前行動をする。定時退校日の確実な実施とともに、行事予定を確認しながら繁忙期の計画的な業務を遂行する。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]	
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。